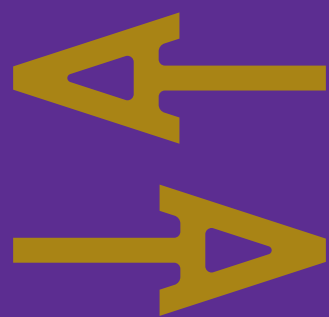




「アート・プレイグラウンド あそぶ PLAY」 Photo: Yasuko Okamura

あいちトリエンナーレ2019 ダイジェスト

AICHI TRIENNALE 2019 DIGEST



情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y/Our Passion



ウーゴ・ロンディノーネ《孤独のポキャブラリー》、愛知芸術文化センター Photo: あい撮りカメラ部

アートが未来を拓く

「あいちトリエンナーレ」は、3年に一度、愛知県で開催される国内最大規模の国際芸術祭である。国際現代美術展のほか、映像プログラム、パフォーマンス、音楽プログラムなど、様々な表現を横断する最先端の芸術作品を紹介した。4回目となる2019年は、ジャーナリストである津田大介を芸術監督に迎え、社会情勢を踏まえたテーマ性の高い内容で展開された。

参加アーティスト数 — 93組
総来場者数 — 675,939人
経済波及効果 — 約87億円

あいちトリエンナーレ2019

テーマ：情の時代 Taming Y/Our Passion

2019年8月1日(木)～10月14日(月・祝)[75日間]

会場：愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、四間道・円頓寺、豊田市美術館・豊田市駅周辺

開催目的：新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献する。
現代芸術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図る。
文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図る。

Contents

- 06 情報、感情、情け。^{なご}「情」で解く現代社会
- 08 芸術祭で「ジェンダー平等」を実現!
- 10 ^{歴史ある街並みと活気ある商店街}
^{しけみち えんどうじ}「四間道・円頓寺」で初めての芸術祭
- 12 ^{自動車産業の都市}
「豊田」をアートで再発見
- 14 ロックやポップスが芸術祭の枠を広げる
- 16 感情を揺さぶった多彩な舞台
- 18 ^{エデュケーションから}
ラーニングヘシフト
- 20 来場者の声を集めました!
- 21 「表現の自由」をめぐる議論
- 22 主要データ一覧



開幕セレモニーの様子 ピア・カミルの作品《ステージの幕》前にて
愛知芸術文化センター Photo:Yasuko Okamura

あいちトリエンナーレ2019

テーマ: 情の時代

Taming Y/Our Passion

会期: 2019年8月1日(木)~10月14日(月・祝) [75日間]

会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、
四間道・円頓寺、豊田市美術館・豊田市駅周辺

芸術監督: 津田大介(ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主催: あいちトリエンナーレ実行委員会

スタジオ・ドリフト《Shylight》、豊田市美術館 Photo:あい撮りカメラ部

情報、感情、情け。^{なさ}「情」で解く現代社会

「あいちトリエンナーレ2019」ではデジタル技術やインターネットと連動した作品が含まれていたことが特徴のひとつ。テーマである「情の時代」の「情」は、情報、感情、情け^{なさ}などの意味を持つ。「情報によって煽られた感情に翻弄された人々が世界中で分断を起しているのではないか?」という問題意識から、テーマが設定された。世界を対立軸で捉えるのではなく、アートの持つ力で人々の情け^{なさ}に訴えることによって問題解決の糸口にしていきたいという希望が含まれていた。



dividual inc. 《ラストワーズ／タイプトレース》、愛知芸術文化センター Photo:あい撮りカメラ部

メディアアーティストの遠藤拓己と情報学研究者ドミニク・チェンのベンチャー企業dividual inc.が発表した《ラストワーズ／タイプトレース》は、ネットで集まった遺言が次々とモニターに表示されるインスタレーション。同社が開発した「TypeTrace」によってキーボードの入力速度や文字の削除などのプロセスが全て再生される演出は、書き手の存在を生々しく感じさせた。



エキソニモ《The Kiss》、愛知芸術文化センター Photo:あい撮りカメラ部

千房けん輔と赤岩やえのユニット、エキソニモは、新作《The Kiss》でスマートフォンのようなモニターを重ね、あたかも口づける二人を演出。手の部分は3Dプリンターで出力された。複製可能なデータで構成された作品は、親密な愛の行為を不確かなものに映していた。



田中功起《抽象・家族》、愛知芸術文化センター Courtesy of the artist

《抽象・家族》は出自にさまざまなルーツを持ち、かつ日本に暮らす出演者4人が一軒家、劇場、絵画スタジオなどで対話や行為を積み重ねる映像インスタレーション。会期中には作品を集団で鑑賞し、出演者やゲストらと交えた対話を行う場「アッセンブリー(集会)」も開催した。



レジーナ・ホセ・ガリンド《LA FIESTA #latinosinJapan》、愛知芸術文化センター Photo:あい撮りカメラ部

《LA FIESTA #latinosinJapan》は名古屋に暮らすラテンアメリカ出身の労働者に参加を呼びかける、同じくラテン出身のアーティスト主催のパーティーを記録した映像作品。ラテン的趣向を凝らしたパーティーは、彼らの日常生活に隠されているかもしれないラテンの精神を祝福するかのようだ。



CIR(調査報道センター)の展示風景、愛知芸術文化センター Photo:あい撮りカメラ部

アメリカの非営利報道機関CIR(調査報道センター)は、文章か映像で報道されるのが一般的な調査報道を、アニメーション、演劇、ヒップホップ、アプリなど多様な表現で伝えている。デジタル時代の新しい報道スタイルとして注目されている。今回はえりすぐりの映像6点を展示。



ドラ・ガルシア《ロミオ》、愛知芸術文化センター Photo:Tetsuo Ito

冷戦時代の諜報活動に着想を得た《ロミオ》はパフォーマンス作品。愛知で選ばれた男性9人をロミオとして登場させたポスターを展示。ロミオは会場を歩きまわり、来場者に声をかけ、会話を楽しむ。ポスターから「仕込まれたもの」とわかったとしても、運命を感じた来場者がいたのでは?!

芸術祭で「ジェンダー平等」を実現!

「あいちトリエンナーレ2019」では参加アーティストの男女比が半々になった。当初から選考過程に「男女半々」のルールが設けられていたわけではない。キュレーターが、テーマ「情の時代」に回答するアーティストを提案する中で、自然とバランスが取れていた男女比を、最終的に半々にした。ここ最近ジェンダーバランスは、とりわけ海外の芸術祭や映画祭で意識されることが多くなっている。「あいち」もその先進的な取り組みに加わった。



文谷有佳里「なにもない風景を眺める」、愛知芸術文化センター
Photo: あい撮りカメラ部

美術、音楽、建築のバックグラウンドを持つ文谷有佳里のドローイングには、音楽の即興演奏のように規則性を持ちつつ、自由な伸びやかさと奥行きや立体感が感じられる。ガラス面の作品は、トリエンナーレ開幕時期に名古屋に数日間滞在してライブドローイングで仕上げた。



モニカ・メイヤー《The Clothesline》、名古屋美術館 Photo: Yasuko Okamura

ジェンダー平等を実現するきっかけとなったのは、メキシコの実験的フェミニスト・アートの先駆的存在、モニカ・メイヤーだった。「あいちトリエンナーレ2019」に先駆けて2019年6月にワークショップを開催。その参加者と整理した4つの質問（「女性として差別されていると感じたことはありますか？ それはどのようなものですか？」「あなたや、あなたの身近でセクハラ・性暴力がありましたか？ それはどのようなものでしたか？」「セクハラ・性暴力を無くすために何をしましたか？ これから、何をしますか？」「これまでに受けたセクハラ・性暴力に対して本当はどうしたかったですか？」）が印字されたピンクや紫色のカードが展示室に用意された。会期中は来場者に自由に回答してもらい、コメント付きのカードが洗濯ばさみでロープに足されていった。



碓井ゆい「ガラスの中で」、名古屋美術館 Photo: Yasuko Okamura

女性と労働といったテーマを刺繍などで表現してきた碓井ゆいは、自身の妊娠を機に生命という新たなテーマに踏み込んだ「ガラスの中で」を出品。刺繍で描かれたモチーフは染色体の構造をなぞりながら、生命の倫理を考えさせた。



青木美紅《1996》、名古屋美術館 Photo: Yasuko Okamura

《1996》は青木美紅の生まれた年であり、クローン羊「ドリー」誕生年でもある。18歳の時に配偶者間人工授精で生まれたことを知って以降、「選択された生」について考察を続け、ラメ糸で刺繍した絵画やゾートローブ（映像的に回転する連続絵）を用いた表現活動を行っている。



藤原葵《Conflagration》、愛知芸術文化センター
Photo: あい撮りカメラ部

横幅15メートルに及ぶ巨大絵画に描かれているのは、藤原葵が幼少期より親しんできた「機動戦士ガンダム」や「エヴァンゲリオン」といったアニメに影響を受けている爆発のシーン。点描や絵の具をしたたらせる技法、塗り込められた光る箔など細部にまで手間がかけられた大作。

映像プログラムの参加アーティストは女性が過半数!

欧米の映画業界から始まった「50/50 by 2020」(2020年までに俳優やスタッフの雇用条件の性別格差をなくす、映画祭選考委員の男女比均等をめざす運動)を考えると、映像プログラムの参加アーティスト14組中8組が女性となった点は特筆に値する。

内容は、実験的なものから独自の物語性を持つ、国内外から厳選した日本初上映3本と新作1本を含む15本の映像・映画作品。愛知芸術文化センター内の上映会場に用意した約200席はほとんどの上映回で満席を記録。

また、名古屋駅近くの映画館「ミッドランドスクエア シネマ」では「特別オールナイト上映」を開催し、140席余りが埋まる盛況ぶりだった。

日本初上映にアレハンドロ・ホドロフスキー監督『ホドロフスキーのサイコマジック』、富田克也監督『典座-TENZO-』、吉開菜央監督『Grand Bouquet』。新作にカンパニー松尾監督『A Day in the Aichi』(「シネマスコーレ」でも上映)。



吉開菜央『Grand Bouquet』上映後、愛知芸術文化センター
※吉開菜央と津田大介芸術監督とのトークの様子 Photo: Yasuko Okamura

『Grand Bouquet』は、自分より遙かに巨大な力を持つ「黒い塊」を前に言葉を紡ごうとする女の物語で、カンヌ映画祭にも選出された話題作。制作者の吉開菜央は映像作家、ダンサー、振付師として多才に活躍している。

「四間道・円頓寺」で初めての芸術祭

美術館だけではなく、まちなかでの作品展示もあることが「あいちトリエンナーレ」の特徴のひとつになっている。2019年の新たなまちなか会場には、江戸時代から続く蔵や伝統的な建物が残る「四間道・円頓寺」地区に決定。近年は空き家を活用した若手店主の出店が相次ぐ話題のエリアだ。美術館外での展示経験が豊富なアーティストたちはフィールドワークを重ね、場所の特性を読み解くなかで得た気づきや発見を作品に表現した。



「なごのステーション」外観 Photo:あい撮りカメラ部

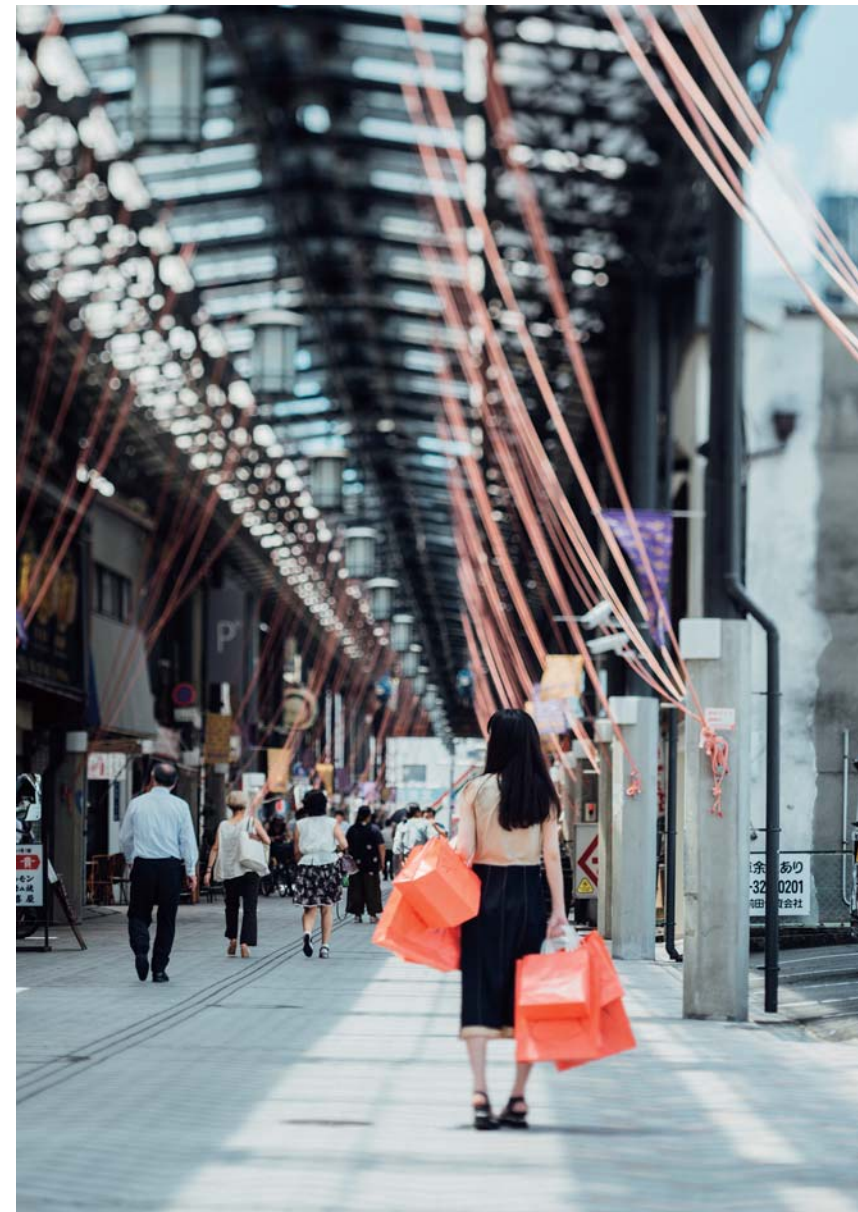
「なごのステーション」は来場者を「もてなす」円頓寺地区のまちなか拠点として、ラーニングチームによって運営された。また、作品展示もあり、洪松明(ソニン・アン) & ジェイソン・メイリングによる架空の音楽のジャンル名とそれを象徴するグラフィックがサウンドとともにループで上映され、関連したワークショップ「世界を変える曲※」が会期中の9月上旬に実施された。

※一般から募った参加者に「世界を変える歌とはどのようなものか?」という問いを投げかけ、ワークショップを通して曲を制作。参加者とともに「MUSIC&ARTS FESTIVAL」のステージで成果を発表した。



津田道子《あなたは、その後彼らに会いに向こうに行っていたでしょう。》、伊藤家住宅 Photo:Takeshi Hirabayashi

江戸時代の尾張藩御用商人「伊藤家」の住宅は、県指定文化財に指定されている貴重な遺構。津田道子は江戸時代の建造物の特徴を捉え、二間続きの座敷にスクリーン、両面鏡、空枠、カメラを設置し、鑑賞者に様々な視点からの景色を見せるインスタレーションを制作。岩崎貴宏は伊藤家が炭を扱う商家だったことに想を得て、土蔵の中に積み重ねた建具などを黒炭で覆い、空襲を受けた名古屋の風景をつくりだす一方で、現在のテレビ塔や円頓寺アーケードの精細な模型を置き、時空を行き来するインスタレーションを制作。



アイシェ・エルクメン《Living Coral / 16-1546 / 商店街》《Living Coral / 16-1546 / 店》円頓寺商店街・円頓寺本町商店街アーケード Photo:Takeshi Hirabayashi

トルコ出身のアイシェ・エルクメンは、「円頓寺七夕まつり」の飾りを吊るすのに使用する商店街のアーケードにかかったロープの色をピンクに変化させた。また、いくつかの商店に協力してもらい、ピンク地にそれぞれの商店のイメージをあらわすドローイングを描いた買い物袋も制作した。ピンク色には、色見本で知られる「PANTONE社」が選んだ2019年のテーマカラー「珊瑚色」が採用されている。空間に「あるシンプルな仕掛け」を施すことで、その土地で見過ごされていた物や人とのつながりを可視化することが得意なアーティストならではの手法。

毒山凡太郎によるインスタレーション、メゾンなごの808(円頓寺本町商店街内) Photo:Kenji Morita

毒山凡太郎は、東京オリンピック直前の新幹線開業で全国的に広まり、名古屋の名物となった和菓子ういろを花びら型にして満開の桜を表現した新作《Synchronized Cherry Blossom》。日本統治を経験した台湾のお年寄り取材した《君之代》。深夜に路上や電車内で眠る酔客にグローバル企業のロゴを記した布をかけていく《ずっと夢見てる》という新旧3作品を展示。それぞれ独立しながらも呼応し、人々の認識や社会構造の変化を見せる構成に仕上がっていた。



グウ・コルー《葛宇路》、円頓寺銀座街店舗跡 Photo:あい撮りカメラ部

中国出身の葛宇路(グウ・コルー)もまちなか展示にふさわしい作品を発表。自分の名前の末尾が「路」であることを利用して、名前を記した標識を北京市内の名もなき道路に設置する作品《葛宇路》を円頓寺に持ち込んだ。遊び心がありながら、鑑賞者に設置した道路標識の顛末を知らせる展示構成となっており、「公共のメカニズム」を問いかける作品に仕上がった。



越後正志《飯田洋服店》、那古野二丁目長屋 Photo:あい撮りカメラ部

ものと作家自身の移動を重ね合わせ、純粋な場所の移動をもって作品化する越後正志が今回見つけたのは《飯田洋服店》。テラーだった先代の道具類や什器を20メートル離れた「那古野二丁目長屋」に移動して展示。代わりに透明なアクリル板で作った同じ形状の什器を元の場所に設置した。

自動車産業の都市

「豊田」をアートで再発見

今回初めて会場となった豊田市。メイン会場の豊田市美術館は日本を代表する建築家・谷口吉生の代表作でもあるが、優美で繊細なインスタレーション作品(参照:P04スタジオ・ドリフト《Shylight》)から巨大彫刻作品までバリエーション豊かな展示で来場者を魅了した。また、近隣の建物やまちなかの空きスペースを展示会場として使うことで、面的な広がりを持たせ、車移動では気づきにくい豊田のまちなかの面白さを発見することができた。



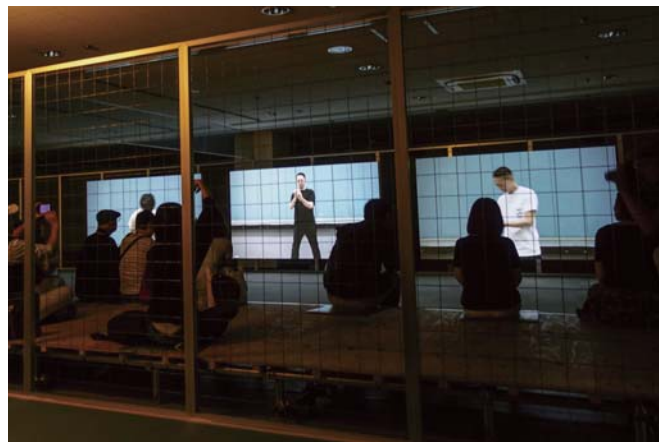
喜楽亭

元料理旅館で大正期の町屋建築を今に伝える「喜楽亭」は登録有形文化財。戦争末期に神風特別攻撃隊が出発前夜を過ごした場所でもある。シンガポール出身のホー・ツーニエンはこの建物の記憶を調査し、アジアの歴史を考察する映像インスタレーション《旅館アポリア》を構成した。鑑賞には90分余りを要する大作。



高嶺格《反歌:見上げた空を悲しむ その色に染まり果てにき 我ならぬまで》、旧豊田東高等学校 Photo: Takeshi Hirabayashi

豊田市美術館に隣接する旧豊田東高等学校では、高嶺格がプールの底を垂直に立てた作品の迫力が圧巻だった。立ち上がったコンクリートの床の高さは約12メートル。今回のトリエンナーレにおいて最大級の作品となった。



アンナ・ヴィット《未来を開封する》、豊田市民ギャラリー Photo: あい撮りカメラ部

地元で自動車産業に携わる人々と話し合いを重ね、新作《未来を開封する》を発表したアンナ・ヴィット。労働作業から特定の動きを抜き出し、共同で振付けを考え、楽器演奏に挑戦し完成したパフォーマンス映像だ。また、愛知芸術文化センターでは、典型的な会社員を演じる人々が60分間ビジネス・スマイルをし続ける映像作品《Sixty Minutes Smiling》(2014年制作)を展示した。



和田唯奈(しんかぞく)《レンタルあかちゃん》、シティプラザ Photo: あい撮りカメラ部

《レンタルあかちゃん》は受付で渡されたあかちゃんの絵を持って豊田市駅下の空き店舗とシティプラザの2会場を往復し、アトラクションをクリアすることを通じて「子守り」を体験する作品。和田唯奈が主宰する絵画教室のグループ「しんかぞく」が、あかちゃんの原画やシティプラザの壁画を制作した。



トモシ 《Dig Your Dreams.》、名鉄豊田市駅下 Photo: あい撮りカメラ部

トモシが1ヶ月あまりかけてひとり掘り起こした発掘現場《Dig Your Dreams.》には、トヨタ自動車の企業ロゴになぞらえた形の穴から関連資料が掘り起こされた演出が施されていた。まちの歴史を調べる先に必ず「トヨタ」関連の事項が掘り出されるにも関わらず、まちには「トヨタ」のロゴが想像していたよりも少ない、という気づきが本作の出発点。



小田原のどか《↓(1946-1948)》、名鉄豊田市駅下 Photo: あい撮りカメラ部

まちなかでは、彫刻家であり日本の公共彫刻の変遷を研究している小田原のどかが、自身の彫刻作品と関連資料を合わせて展示することで、「公共彫刻」に潜んだ課題を浮かび上がらせようと試みた。駅前広場「新とよパーク」では、来場者がその上に立つことで完成する、空の台座《↓(1923-1951)》を設置し、名鉄豊田市駅下では長崎の爆心地に置かれた矢羽形の標柱を表した作品《↓(1946-1948)》とその関連資料で構成した作品《↓(1946-1948 / 1923-1951)》を展示した。

ロックやポップスが芸術祭の枠を広げる

これまで実施してきたプロデュースオペラに代えて、今回初めてロックやポップスなどのライブステージを中心とした「音楽プログラム」を実施。現代アートのファンだけではない新たな観客層を呼び込んだ。

『MUSIC&ARTS FESTIVAL』 Photo: Yasuko Okamura

9月14日は『MUSIC&ARTS FESTIVAL』を開催！ステージは愛知芸術文化センター内にある愛知県芸術劇場大リハーサル室、2階フォーラム、愛知県芸術劇場小ホールの3カ所。80年代から活躍するベテランバンドのカーネーションから、若手ミュージシャンまで多数参加。多彩な音楽漬けの祭りとなった。



『円頓寺デイリーライブ』、円頓寺駐車場 Photo: Yasuko Okamura

円頓寺商店街「長久山円頓寺」の駐車場に特設ステージが登場し、毎週木曜から日曜の19時から、日替わりでミュージシャンのライブが行われた。「円頓寺デイリーライブ」のために鷺尾友公が描き下ろした巨大壁画が特設ステージを彩り、商店街という“日常空間”が、アートと音楽で彩られた“非日常空間”に変わる体験を提供した。



ユザーン『Chilla: 40 Days Drumming』
なごのアジール Photo: Yasuko Okamura

タブラ奏者のユザーンは、「チッラー (Chilla)」という北インドの古典音楽家の修行に着想を得たインスタレーションを実施。40日間、毎日10時間にわたって演奏に没頭する姿を一般公開し、来場者に驚きと感動を与えた。



サカナクション『暗闇-KURAYAMI-』、愛知県芸術劇場大ホール Photo: 後藤武浩、高木美佑

音楽プログラムで反響が大きかったものの一つ、サカナクションによる『暗闇-KURAYAMI-』では約2,500人を収容できる愛知県芸術劇場大ホール4日間7公演のチケットが瞬時に完売。サカナクションの通常公演とは趣向が異なり、場内では完全に照明を落とし、最新の音響システムでサウンドを聞かせる意欲的かつ実験的な公演を行った。



純烈 Presents『1969年の前川清と藤圭子〜昭和を彩るロックとブルース〜』
愛知県芸術劇場大ホール

歌謡ボーカルグループ「純烈」のリーダー・酒井一圭が総合プロデュースを務めたコンサート。昭和の歌謡シーンにおいて強い存在感を放った歌手、前川清と藤圭子を取り上げ、ふたりのレパートリーを若手アーティストらと独自の解釈でカバー。老若男女に新鮮な音楽体験を届けた。

感情を揺さぶった多彩な舞台

過去のパフォーミングアーツではダンスを中心にプログラムを構成していたが、今回は演劇中心のプログラムとし、国内外の先鋭的な14演目を上演した。9演目の演劇作品に加え、「エクステンション企画」と題し、国際現代美術展の参加アーティストであるドラ・ガルシア、藤井光、キュンチョメ、田中功起、ドミニク・チェン (dividual inc.) によるレクチャー形式のパフォーマンス等を行った。現代美術、映像作品、演劇など様々な表現を横断するパフォーマンスの実施は、複数のプログラム (国際現代美術展、映像プログラム、パフォーミングアーツ、音楽プログラム、ラーニング) で構成される「あいちトリエンナーレ」ならではの。



サエボーグ『House of L』、愛知県芸術劇場大リハーサル室 Photo:Masahiro Hasunuma

自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開してきたサエボーグは、初の演劇的インスタレーション『House of L』を披露。キモかわいい家畜キャラクターたちが暮らすリビングに観客を招き入れた。食物連鎖の最底辺で生きる家畜たちの無邪気で残酷なパフォーマンスを、観客の間近で展開した。



劇団アルテミス+ハット+ザウデライク+トネール『ものがたりのものがたり』名古屋芸術創造センター Photo:Shun Sato

ヴェネツィア・ビエンナーレ2019で銀獅子賞を受賞したばかりの話題作『ものがたりのものがたり』がアジア初上陸。トランプ大統領やビヨンセの巨大な切り抜き人形も登場する演出は、過激なまでに自由奔放で痛快。シュールな刺激にも満ちあふれ、笑いを誘った。



劇団うりんこ+三浦基+クワクポリョウタ『幸福はだれにくる』愛知県芸術劇場小ホール Photo:Masahiro Hasunuma

愛知を拠点とする劇団うりんこが演出家の三浦基 (地点)、美術家のクワクポリョウタを迎え、ロシアの児童文学作家マルシャークの戯曲『幸福はだれにくる』を初演。ユーモラスで深遠な劇に、光と影がゆらめく美術が重なり、幻想的な空間を創出した。名古屋、豊田で上演。



小泉明郎『縛られたプロメテウス』、愛知県芸術劇場大リハーサル室 Photo:Shun Sato

「あいちトリエンナーレ2010」にも参加した映像作家・小泉明郎は、VR技術を使って本格的な演劇作品に初挑戦した。ギリシャ悲劇『縛られたプロメテウス』(アイスキュロス作)を出発点に編み上げられた、VRを通して見る近未来の世界は、自分とは異なる「他者」の感覚や感情を迫体験させるものだった。



ミロ・ラウ (IIPM) + CAMPO 『5つのやさしい小品』、愛知県芸術劇場小ホール Photo:Masahiro Hasunuma

演出家、劇作家、映画監督、ジャーナリストとして活躍するミロ・ラウはベルギーの劇場CAMPOの招きを受け、オーディションで選んだ現地の子どもたちと創作。『5つのやさしい小品』はベルギーで実際に起きた少女監禁殺害事件を題材にしている。(ミロ・ラウは映像プログラムにも出品した。)



市原佐都子 (Q) 『バックスの信女-ホルスタインの雌』、愛知県芸術劇場小ホール Photo:Shun Sato

劇作・演出家の市原佐都子は、ギリシャ悲劇『バックスの信女』(エウリピデス作)のテーマや構造を大胆に咀嚼した作品を今回新たに創作し、その戯曲は第64回岸田國士戯曲賞 (白水社主催) も受賞した。

エデュケーションから
ラーニングヘシフト

前回まで「普及・教育(エデュケーション)」だったプログラムの名称を「ラーニング」に改め、参加者同士が相互に「学ぶ」ことができるプログラムの提供を目指した。また、4つのキーワード「受け止める」「深める」「形にする」「オーナーシップ」を掲げ、来場者の創造性を発揮できるスペースとして「アート・プレイグラウンド」を初めて設置。さらに5つのテーマ「あそぶ」「はなす」「つくる」「もてなす」「しらせる」を設定し、5種類の特性を持たせたスペースが誕生した。

アート・プレイグラウンド

Photo: Yasuko Okamura



あそぶ PLAY

「あそぶ」(愛知芸術文化センター)では、建築家の遠藤幹子とアーティストの日比野克彦とともに、ダンボールの造形を研究してきた愛知県内の小学生たち「ダンボール研究会(通称ダン研)」のメンバーが中心となって道具の数々を制作。それらは来場者のアイデアで変形・拡張され、自己責任で自由に遊ぶ公園のような場所となった。



つくる CREATE

「つくる」(名古屋市美術館)では、来場者が自ら手を動かし、素材に直接触れながら作品制作に取り組んだ。「考えながら作る/作りながら考える」という、ものづくりの大事なプロセスを体験できるような場となった。



はなす TALK

「はなす」(愛知芸術文化センター)は、作品について考えたことを互いに議論する場所。「てつがくカフェ」の手法を参照し、テーマに沿って健やかに対話することで、作品をより深く、多角的に楽しむことを促した。



もてなす INTERACT

「もてなす」(「なごのステーション」(円頓寺・四間道))には、この地域のオリジナル商品を開発するための研究開発室を設けた。来場者は研究員となって、地域の人々、商店街の人々と一緒にアイデアを出し、開発したものは近隣店舗と協力して実際に販売することを目指した。



しらせる OUTREACH

「しらせる」(豊田市美術館)では、来場者の人に知らせたいこと、伝えたいことをサポートする場所を設けた。トリエンナーレで考えたことや見つけたことをラジオでしゃべったり、簡単な雑誌にしてみたり、Tシャツやバッグに印刷したり刺繍したり、様々な「しらせる」表現を試みた。



ボランティアによるガイドツアーの様子、愛知芸術文化センター(バンクロック・スワップ《進化の衰退》前にて) Photo: あいほりカメラ部

今回のトリエンナーレではラーニングの専門家を中心となり、「対話型鑑賞」を軸としたボランティア研修の内容を充実させた。1,200名に及ぶボランティア登録者に「関わって良かった」としてもらうだけでなく、地域へのノウハウ資源の定着にもつなげるためだ。研修を受けたボランティアは団体鑑賞やガイドツアーにおいて、単に一定の専門知識を持つガイドではなく、鑑賞者の様々な作品解釈を促すファシリテーターとしても活躍した。



ベビーカーツアーの様子、愛知芸術文化センター(スチュアート・リングホルト《原子力の時計》前にて) Photo: Yasuko Okamura

「ベビーカーツアー」は2016年のトリエンナーレでも好評だった企画。対象は18カ月までの子どもとその保護者。ガイド役はキュレーターが務め、保護者をサポートするスタッフを準備し、途中で授乳をしたり、おむつを換えたりしても再びツアーに戻ることができる環境を整えた。また子どもの関連では、ラーニングの発案で「託児サービス」を初めて導入した。会期中、「アート・プレイグラウンド(あそぶ)」会場内に3歳から小学校就学前の児童を対象とした託児スペースを開設。育児中においても子どもとアート鑑賞を楽しめる、あるいは保護者だけでアート鑑賞に集中できる機会を増やした。



アーティスト「と」みるツアー(アーティスト: 下道基行)の様子、愛知芸術文化センター(田中功起《抽象・家族》の展示室にて) Photo: Yasuko Okamura

アーティスト「と」みるツアーは、ラーニングが企画した今回初の試み。アーティストが「先生役」として「正解」を答えるのではなく、新しい視点の提案者として一緒にツアーに参加することで、来場者の作品の見方を広げ、作品鑑賞の体験がより深まることを目指した。過去に展出したアーティスト等6名(下道基行、宮永愛子、小栗沙弥子、山本高之、山口恵子、寺内曜子)によるツアーが会場を違えて6回実施された。

来場者の声を集めました!



左:エキニモ《The Kiss》 右:円頓寺商店街アーケード Photo:あい撮りカメラ部

〈テーマ「情の時代」ほか内容について〉

- 若い作家、女性作家が多く登場しており、非常に良いと思った。また、表現の手法がどんどん拡張、クロスオーバーされており、ますますアートが自由になる気配を感じた。
- 大変興味深く、考えさせられる作品ばかりで感動しました。実際に見ることができた作品からはインスピレーションを受け取りましたが、展示中止になっている“展示を見ることができたはずの作品”にも心が動きました。良い、悪いという二極面からではなく、いろいろな面で議論され、作品たちがあるべき姿で人々の前に現われることを願います。
- 今回は戦争を題材にした作品が多い様に感じました。後世に残すことは必要だと思いますがアートイベントとしてテーマが重過ぎます。芸術祭というお祭りの位置づけならもう少し楽しめる内容のほうが良いのではないのでしょうか。
- 今回のテーマ“情の時代”にはとてもタイムリーなものを感じました。現代社会のモヤモヤした何か引っかかるものの原因を提示してもらったように思います。
- アートを通して、様々な社会の問題、ひずみ、ゆがみに気づけるのはとてもよいと思います。今後も色々な視点からの気づきの場を作ってください。
- 体感できるアートが多く、発想もおもしろいものばかりだった。
- 今回のように皆で共有できるような話題が出てくることはとても良いと思います。違ういろんな意見が出る企画で良いと思います。
- 政治的な影響を受ける内容を展示する場合、事前にオープンなシンポジウム等行い、展示に対して批判を受けない仕立てが必要だと思います。
- 政治、ジェンダー、日本人の韓国への対応など、様々なことが浮き彫りになっており、大変勉強になった。
- 今後も、このように社会の問題を取り扱った作品や作家を取り上げる展覧会であってほしい。世界のアートの動向を持ってくる、そこに意味があると思う。
- 今回のテーマで展示された作品は、時代に呼応していて、今生きる上で立ち止まりたいこと(視点、問題意識)を捉えていると思います。鑑賞しながら友人たちと国際問題、歴史、メディア、家族のことをたくさん議論しました。こんな骨太な美術展はなかなか東京でも出会えません。



アート・プレイグラウンド Photo:あい撮りカメラ部 Photo:Yasuko Okamura

〈アート・プレイグラウンドについて〉

- 「しらせる」を体験しました。普段芸術に触れる機会がありませんので、とても新鮮で楽しかったです。
- 子どもが大変喜んでいました。自分自身もダンボールを使って楽しめました。
- ダンボール公園がよかった。4歳、1歳の子どもを美術館にはなかなか連れてこれないので、遊び場のようで学べる場があって、子連れも参加しやすかったです。
- 子どもが遊べる空間があったことが、親として嬉しかった。これからの子どもたちの発想や夢が広がるといった!!
- 子どもがとても喜びました。託児があるのも嬉しかったです。
- 「はなす」で直接見た人同士で話せる仕組みが良かった。



「あいちトリエンナーレ2019」オリジナルラッピングカーが会場間シャトルとして運行 Photo:あい撮りカメラ部

〈運営について〉

- フリーパスの安さや、アプリの質の良さは驚きです。アートを見る側の裾野を広くしようというささやかな野望も感じます。
- 交通案内もわかりやすく、スタッフやサポーターの方も皆親切でした。
- 1DAYパスをフリーパスへグレードアップできるのがよかった。
- フリーパスで同じ会場を何回も観られる仕組みになって良かったです。
- ボランティアさんのガイドツアーがとても楽しく、他の人の感想も聞けて良かった。

「表現の自由」をめぐる議論

「表現の不自由展・その後」展示中止、そして再開

「あいちトリエンナーレ2019」で106あった企画のうちの1企画「表現の不自由展・その後」は2015年に東京で開催された「表現の不自由展」をベースに、2015年以降の事例も加えて公開された。公立美術館等で過去に何かしらの理由で展示ができなくなった作品が揃えられた。特定の主義主張に与するものではなく、来場者に「表現の自由」について考えてもらうきっかけにしたいという趣旨の企画だった。しかし、「平和の少女像」などに注目が集まり、SNSなどで様々な情報が拡散。苛烈な電話攻撃や脅迫が相次ぎ、8月4日から展示中止となった。

参加アーティストの中には「表現の不自由展・その後」の展示中止は検閲行為にあたると捉え、「検閲」に反対するために自身の出品作の展示を一時的に中止したり、展示内容を変更したりするケースも起こった。また、アーティスト主導で「表現の自由」に対して意見を交換し合う場所や機会が設けられるなど、参加アーティストらが事態の打開を試みようとする動きが起きた。

さまざまな立場の関係者の働きのもと、10月8日に安全面などの対策を講じた上で「表現の不自由展・その後」が再開。一時的に作品の展示を中止していたアーティストの作品と合わせて「あいちトリエンナーレ2019」展示作品の全面再開が実現した。



再開後の「表現の不自由展」展示室内にて、鑑賞者同士がキュレーターを交えてディスカッションしている様子



モニカ・メイヤーの作品、名古屋市美術館
左:《The Clothesline》 Photo:Ito Tetsuo 右:《沈黙のClothesline》 Photo:Yorita Akane

《The Clothesline (直訳:物干し用ロープ)》はピンクや紫のカードに来場者がセクシャル・ハラスメントの経験などを記入し、ピンクの枠内のロープに洗濯ばさみで吊るしていく参加型の作品。「表現の不自由展・その後」の公開中止を受け、作品には《沈黙のClothesline》として変更が加えられた。吊るされた記入済みのカードを全て回収し、未記入のカードが破られて床にばら撒かれた。



「#YourFreedom」プロジェクト、愛知芸術文化センター
Photo:橋爪勇介(美術手帖) 提供:美術手帖

「あいちトリエンナーレ2019」展示作品の全面再開を目標にした参加アーティストによるプロジェクト「ReFreedom_Aichi」が発足。モニカ・メイヤーの作品《The Clothesline》のコンセプトを受け継ぎ、「自由を奪われた経験」や「不自由を強いられた経験」を来場者に書いてもらったピンクのカードを閉じられた展示室の扉に貼っていく「#YourFreedom」プロジェクトを実施。その他、誰でも質問や意見、感想をアーティストに直接伝えることができる「J」アート・コールセンターや、アーティストと顔を合わせて直接に議論を行える場所「サナトリウム」などを開設した。



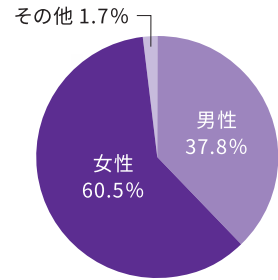
愛知芸術文化センター Photo:Yasuko Okamura

「表現の不自由展・その後」再開後の鑑賞は、抽選のうえ、定員ごとの各回40～60分の入替制で実施。同展示室に入場する前に、「表現の自由」を巡る論点をまとめた解説パネルを掲示し、ガイダンスをおこなった。また、キュレーターがファシリテーターとなり鑑賞者がディスカッションする時間を設けるなど、ラーニングのプログラムを増強することで展示趣旨を理解してもらえる環境づくりを図った。

DATA

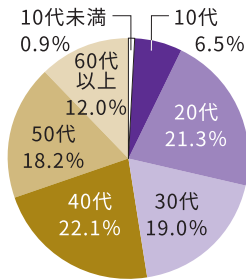
国際現代美術展への来場者の状況

来場者の男女比



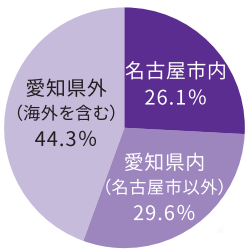
女性が61%
男女別では、女性が60.5%、男性が37.8%となっている。

年齢別来場者



30代以下が48%
来場者の年齢別では、30代以下の若い世代が47.7%を占めている。

地域別来場者



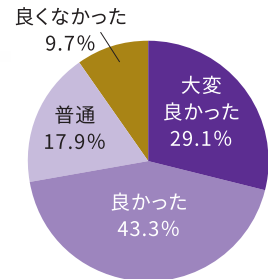
来場者の44%は県外から
来場者の地域別割合は、県外44.3%、名古屋市内26.1%、名古屋市以外の県内29.6%。県外からは、ほぼ全都道府県からの来場があり、そのうち半数近くが、首都圏・京阪神からであった。



愛知芸術文化センター Photo:あい撮りカメラ部

来場者アンケート結果

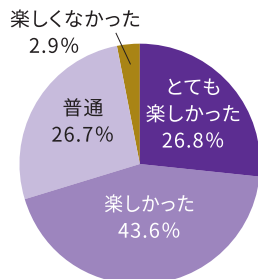
全体の感想



良かった72%
来場者の72.4%が「大変良かった」または「良かった」と回答。

「アート・プレイグラウンド」アンケート結果

今日は楽しかったか

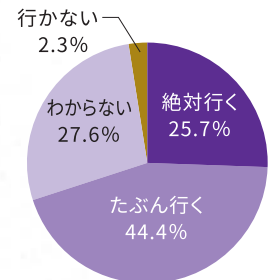


楽しかった70%
参加者同士が相互に学ぶことができるプログラムを提供した「アート・プレイグラウンド」参加者の70.4%が「とても楽しかった」または「楽しかった」と回答。



Photo:Yasuko Okamura

次回トリエンナーレに行きたいか



行きたい70%
来場者の70.1%が次回のトリエンナーレにも「絶対行く」または「たぶん行く」と回答。

数字で見る「あいちトリエンナーレ2019」

アーティスト数

93組

「情の時代」というテーマのもと、世界30の国と地域から93組のアーティストが参加。最先端の現代美術、多彩なパフォーマンスアート、新たな試みとしての音楽プログラムを紹介した。

総来場者数

675,939人

8月1日から10月14日までの75日間で、過去最高の67万人以上の方にお越しいただいた。

経済波及効果

約87億円

「あいちトリエンナーレ2019」の開催により、愛知県内では約87億円の経済波及効果があったと考えられる。

パブリシティ効果

約200億円

メディアに取り上げられた件数は、新聞約3,000件、テレビ約650件、ラジオ約30件、Web等約10,500件であった。これらのパブリシティ効果(広告換算費)は約200億円と想定される。

来場者に占める中学生以下の割合

11.1%

来場者のうち、中学生以下の来場者の割合は11.1%であった。

展示面積

20,033㎡

展示面積は通常の愛知県美術館企画展の展示スペースの10倍を超える20,033㎡を使用した。

1日の最多来場者数

30,452人

1日当たりの平均来場者数は9,000人(平日5,844人、土日祝14,985人)であった。

ボランティア登録者数

1,219人

会場運営、ガイドツアーなどの業務に従事するボランティアに1,219人の登録があった。

「アート・プレイグラウンド」来場者数

79,518人

「あそぶ」50,772人、「はなす」2,345人、「つくる」13,569人、「もてなす」11,831人、「しらせる」1,001人の合計79,518人が来場した。

トリエンナーレを鑑賞した学校数

54校

学校行事としてトリエンナーレを鑑賞したのは54校であり、多くの児童・生徒が芸術に触れる機会となった。

企業・団体・個人の支援件数

555件

企業・団体・個人から「協賛」、「協力」、「会場提供」、「有償広告掲載」の支援をいただいた件数は、555件にのぼった。

オフィシャルグッズ

36種類

公式デザイナーグッズ、アーティストグッズ、地元名産品のパッケージをリデザインする「あいちの名産 リ・デザイングッズ」16品目36種類を作成し、オフィシャルショップ等で販売した。

公式ウェブサイトへのアクセス数

1,874,564セッション

会期中には世界中の国と地域から1,874,564セッションのアクセスがあった。

※Google Analyticsによるセッション(訪問)数

Twitterのフォロワー数

23,962人

公式アカウント「@Aichi_Triennale」の「フォロー」を行った人は、開幕時で23,962人にのぼった。

Facebookのファン数

15,180人

公式Facebook「AICHI TRIENNALE」のファン数(いいね!数)は、開幕時で15,180人にのぼった。

Instagramのフォロワー数

4,439人

公式Instagram「aichitriennale」の「フォロー」を行った人は、開幕時で4,439人にのぼった。